

主日礼拝説教「上等のワインを召し上がれ」

日本基督教団石神井教会 2020年1月26日

【旧約聖書日課】出エジプト記 33章12～23節

¹²モーセは主に言った。「あなたはわたしに、『この民を率いて上れ』と言われました。しかし、わたしと共に遣わされる者をお示しになりません。あなたは、また、『わたしはあなたを名指して選んだ。わたしはあなたに好意を示す』と言われました。¹³お願いです。もしあなたがわたしに御好意を示してくださるのでしたら、どうか今、あなたの道をお示しください。そうすれば、わたしはどのようにして、あなたがわたしに御好意を示してくださるか知りうるでしょう。どうか、この国民があなたの民であることも目にお留めください。」¹⁴主が、「わたしが自ら同行し、あなたに安息を与えよう」と言われると、¹⁵モーセは主に言った。「もし、あなた御自身が行ってくださらないのなら、わたしたちをここから上らせないでください。¹⁶一体何によって、わたしとあなたの民に御好意を示してくださることが分かりますでしょうか。あなたがわたしたちと共に行ってくださることによってではありませんか。そうすれば、わたしとあなたの民は、地上のすべての民と異なる特別なものとなるでしょう。」

¹⁷主はモーセに言われた。「わたしは、あなたのこの願いもかなえよう。わたしはあなたに好意を示し、あなたを名指して選んだからである。」

¹⁸モーセが、「どうか、あなたの栄光をお示しください」と言うと、¹⁹主は言われた。「わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ、あなたの前に主という名を宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」²⁰また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」²¹更に、主は言われた。「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。²²わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。²³わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 1章1～4節

¹初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。――²この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。――³わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。⁴わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 2章1～11節

¹三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。²イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。³ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。⁴イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」⁵しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。⁶そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである。⁷イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満した。⁸イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。⁹世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、¹⁰言った。「それでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」¹¹イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

カナの婚宴

今日の福音書日課（ヨハネ福音書2章）は、主イエスが、カナという町で祝われた婚宴に招かれたときのことを伝えています。

当時の婚宴は、場合によっては一週間も開き続ける盛大な宴席だったようです。町中の人々が来て、食べて飲み続けることができるくらい、用意しなければいけなかった。特に、ぶどう酒は肝心です。こういうときは、よいぶどう酒を振る舞わなければいけません。それが、おもてなしの仕方です。ところが、あろうことか、このときは、そのぶどう酒が足りなくなりました。十分に用意していたであろうに、そんなことがあるのでしょうか。そういうことが、あるのです。そういうことが起こるのが、わたしたちの現実の生活です。

教会で何かの祝いや集まりのために食事の用意をすることがあります。何人になるか予測を立てて、準備をしますが、見込み違いということもある。たくさん余るのも困りますが、足りないのも困るのです。そうなったら、あわてて買いに走るわけです。ありがたいことに、もう、皆が食べ始めているというのに、裏で食事の量の心配をしてくださっていて、「食事が足りない！」となれば買いに走ってくださる方があるのです。

「ぶどう酒がなくなりました」。こういうことにすぐ気づくのは、女性、婦人方です。そして、どうにかしなければと、裏で真っ先に動き始めるのも、婦人方です。

「ぶどう酒がなくなりました」。主イエスの母（ここには「マリア」という名は出てきません）が、ぶどう酒のなくなったことを心配して、裏で、どうにかしなければと、走り回り始めていました。

「ぶどう酒がなくなりました」。もう大半の者は、酔っていたのでしょう。もしかすると、主イエスの母が「ぶどう酒がなくなりました」と言っただけでも、「そうかい、そうかい」と言いながら冗談でも返して、流してしまう人ばかりになっていたのかも知れません。

「ぶどう酒がなくなりました」。もしかすると、主イエスのお母さまが自分の息子にそう言ったのは、もう他の誰もまともに応じてくれそうにないと思ったからかも知れません。「ぶどう酒がなくなっているのに、だれも用意しようとしないうのよ。あなたが、どうにかしてくれないかしら」。母親が30歳を超えた息子に雑用を頼むというのは、そんなに簡単なことではありません。自分の息子なのだけれども、ちょっと遠慮がある。主イエスの母の気持ちは分かりませんが、そんなに簡単ではなかったと思います。何となれば、主イエスは、少年時代から、親に向かって利口に口答えするような息子だったのです。反抗的ではなかったかも知れませんが、大きくなればなるほど、一体何を考えているのか、さっぱり分からなくなっていました。挙げ句の果て、家業を継ぐでもなく、さっさと家を出て行ってしまった。親から見れば、そういう息子です。そんな息子が婚宴にやってきていた。そういうことに義理堅かったのでしょうか。それとも、根っからの宴会好きだったからでしょうか。周りの人たちは、主イエスのことを「大食漢の大酒飲み」と批判していたくらいですから。

「この人が何か言いつけたら…」

この婚宴に来ていた主イエスと母は、おそらく久しぶりに顔を合わせたのです。ところが、ここからは私の想像ですが、もしかすると、主イエスは母と顔を合わせたのに、ろくすっぽ挨拶もしなかったのではないのでしょうか。大勢の客の中で、母親そっちのけで、ほかの客人たちと盛り上がっていた。「ぶどう酒が、なくなってしまったのよ、とそっと耳打ちをしても、変わり者の息子がわたしの話を聞いてくれるかしら」というような心配が、主イエスの母の中に、もしかするとあったのではないのでしょうか。

息子の返事は、心配したとおりでした。「**婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。**」

「婦人よ」と訳されていますが、特別よそよそしい言い方をしているわけではありません。「奥様」、「マダム!」といった呼び方です。ただし、息子が母親に言う言い方ではないかも知れません。

それよりも、その後の言葉です。「**わたしとどんなかかわりがあるのです**」。「わたしにかまわないでくれ」といった調子の言葉です。「放つといてよ!」と訳してもよい。主イエスは、このとき、結構酔っぱらっていたかも知れません。あるいは、酔っぱらって、冗談めかして言ったのかも知れない、「奥さん、おかまいなく。まだ時間じゃないでしょうか?」と。

母親というものは、こういう息子に対して、あまり腹を立てたりしないものなのでしょう。たとえ酔っぱらって軽口を叩くようなことがあっても、そんなことでは動じることもない、ある種の息子に対する信頼というものが、母親にはあるものなのかも知れません。もちろん、信頼と言っても、母親の息子に対するものです。それは、全幅の信頼というよりも、血を分けたゆえの信頼というべきかも知れません。信頼しないわけにはいかない。信頼するしかない。そういう関係です。ですから、マリアは、このとき、召使いたちに言うのです、「**この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください**」と。

「この人は、わたしの息子ですが、何かおかしいことを、あなたがたに言いつけるかも知れません。けれども、そのときには、どうか、そのとおりにしてやってください。わたしの息子は、今は酔っぱらっていますし、もともとちょっと変わったところがあるのです。わたしに免じて、どうか、ゆるしてやってください」。

わたしは、母マリアの気持ちは、そんな気持ちだったのかも知れないと、想像します。想像しすぎでしょうか。けれども、彼女は、あるときから、このいい歳をした息子の旅に、ずっとついていくことにしたような人なのです。息子が心配だったのでしょう。他の福音書には、彼女は主イエスが人々に教えているところに弟たちを引き連れて行って息子を取り押さえようとした、という逸話まであります。心配だったので、ちょっと変わり者の三十歳過ぎた息子が。それで、恥も外聞も気にしないで、「子離れできていない」などと批判されることも恐れず、彼女は、息子イエスと、一時も離れないぐらいの思いで、ついていくことにした。息子イエスと、その息子に従うようになった弟子たちの身の回りの世話をするといい名目で、ついていくことにしたのです。

良いぶどう酒を！

この母マリアが、信頼を置くしかない息子イエスのそば近くから離れない歩みを始めたときです。そこで、不思議なことが起こりました。水で満たされた水瓶から水をくんで運んでいくと、それが、ぶどう酒に変わっていたのです。

奇跡でしょうか。それとも、何かのマジックでしょうか。敢えて詮索する必要はないと思います。大切なのは、主イエスがぶどう酒の足りなくなってしまった婚宴の席にぶどう酒をもたらし、という事実です。しかも、「良いぶどう酒」を用意してくださった。これが、主イエスのなさった「しるし」です。神が、御子によって、この世界に良いものをもたらしにくださろうとしている、その御業を始めてくださっている。そのことの「しるし」です。

母マリアは、息子イエスのそばから離れないでいることを決断したとき、その「しるし」を見る歩みを始めたのです。主イエスのしるし。御子のしるし。神の恵み豊かな御業のしるし。弟子たちと共に彼女も、そのしるしを見るようになる歩みを、このときから始めることになったのです。

教会は、ただ主イエスのおそばから離れず、密着して歩むことを願う者たちによって営まれている群れです。ここで、見えない姿の主イエスと共にいて、その近くにいるようにされる。御言葉を聞くときに、見えない主イエスの姿をこの目で見るができるようにしていただく。そのとき、わたしたちは、神の「良いもの」に気づかされていくようになるでしょう。神の御業のしるし、恵みのしるしに、気づかされていくようになるでしょう。それは、神の御業だと気づかなければ、素通りしてしまうようなことです。神の恵みだと気づかなければ、ただ「運がよかった」で済まされてしまうようなことです。けれども、わたしたちが、主イエスの近くにとどまって、そのお姿を見るようになっていくとき、すべては違って見えるようになってくるのです。そこに、神の御子がいらっしゃること。神の御業が働いていること。神の恵みが満ちあふれていること。そのことが、わたしたちに見えるようになってくるのです。

それが、信仰の世界です。それは、小さな信仰かも知れません。それでも、そのわたしたちが、主イエスから離れずにいるならば必ず、信仰の世界、御業の満ちあふれる「良きもの」の豊かな世界へと、目が開かれていくのです。

わたしたちの奉仕は、主イエスの「カナのぶどう酒」を、一人でも多くの人に届けることです。わたしたちも一緒にいただく「カナのぶどう酒」。洗礼を受けたわたしたちは、それが主イエスの用意してくださった「ぶどう酒」だとはっきり信じて、聖餐の「ぶどう酒」をいただくようにされました。聖餐の「ぶどう酒」は、洗礼を受けた者のいただく「カナのぶどう酒」です。その「ぶどう酒」をいただいているわたしたちが、届けるように託されている「カナのぶどう酒」は、どんな「良いぶどう酒」でしょうか。どんな「上等のぶどう酒」を届けることができるでしょうか。

主イエスにお尋ねし続けたいと思います。「主よ、わたしが届けるぶどう酒が、なくなりました」。そして、主に申し上げたいと思います。「主よ、あなたが何か言いつけてくださったら、そのとおりにいたします」。